

早稲田大学博士論文(審査報告書)		
	学位記	文科省報告
2008	4939	乙 2199

## 博士論文審査要旨

### 高晃公氏論文題目

「魯迅の政治思想——西洋政治哲学の東漸と中国知識人」

早稲田大学

大学院政治学研究科

## I 論文の構成

「西洋政治哲学の東漸と中国知識人」の副題をもつ本論文『魯迅の政治思想』は、2007年12月に日本経済評論社から刊行され、A5版で本文305頁、目次v頁、参考文献+あとがき+人名索引+事項索引17頁から成る。その構成は次のとおりである。

はじめに

序 論

第一章 初期の思想

第二章 反孔子教と儒教批判

第三章 魯迅の進化論と退化論

第四章 中国实用主義

第五章 魯迅の思想的転回

第六章 魯迅と中国マルクス主義

第七章 1930年代左翼作家連盟における魯迅

第八章 魯迅の思想

結 語 魯迅から毛沢東へ

## II 論文の概要

序論において、本論文の目的と方法が述べられる。すなわち、政治思想家、政治活動家としての魯迅を、系統的に研究し、これまでの魯迅研究とは異なる、新しい角度からの魯迅とその思想の解明と理解を目指すとされる。こうした研究のモチーフは、竹内好の魯迅研究と丸山真男による日本政治思想史研究を批判的に摂取することから形成された。日本における魯迅研究の嚆矢は、竹内好の『魯迅』である。その先駆性はあきらかであり、その後の魯迅研究に及ぼした影響は今も続いている。しかし竹内好の魯迅研究は、文学者としての魯迅を前面に出し、政治思想家、政治的行動者としての魯迅は、ほとんど言及されなかった。竹内好の研究には、魯迅の文学者としての生涯と文学思想、創作への着目が顕著であるが、魯迅の論文、雑文に表現された政治思想は等閑に付された感がある。他方、丸山真男の日本政治思想史研究は、西洋政治哲学を歴史的、論理的基準として日本における近代的思惟の転回過程を跡づけたものであるが、それはあくまでも儒家内部での思想的

転回過程として理解されたものであった。丸山は西洋政治哲学における近代化論を援用し、儒教それも朱子学における修身齐家と治国平天下の切断という、儒家思想における近代的思惟の形成を指摘した。しかし丸山にあっては、体制の教学たる儒家の特質である民衆の思想に対する無頓着は、ついにその批判の対象となることはなかった。その結果、丸山真男にとっての思想研究における最大のライヴァルとされる竹内好の魯迅を通じた具体的人間論、儒教と対抗する民衆の精神と思想の積極的評価は、丸山真男の政治思想がもつ確固とした論理性と結びつくことは、ついになかったのである。その反対のことが竹内にも言える。ヘーゲルは「思想の閃光」はアジアから起こったが、論理的、概念的な哲学の歴史は西洋にあると述べている。竹内の魯迅研究はアジア的な思想を体現しているが、あくまでも「思想の閃光」にとどまるのであって、系統的な論理的、概念的な歴史意識とは、ついに無縁であった。

こうした両者の研究を踏まえながらも、竹内に見られない、あるいは竹内が軽視した魯迅の政治思想と政治的活動に焦点を当て、魯迅の思想的展開をその生涯において、全体的に跡づけようとしたのが本論文である。あわせて、竹内には見られない、丸山が日本政治思想史において用いた、西洋政治哲学のあざやかな歴史論理的切り口を参考にしながら、現実に中国に東漸してきた当代の西洋政治哲学との魯迅の格闘を描くことによって、中国知識人の文化的特質を解明しようとしたものである。

本論文の構成は重層的な形となっている。一方で、魯迅の生涯における思想的発展を、現実の政治的事象との関係で論じている。他方で、つぎつぎに東漸してくる西洋政治哲学を受容し自己の政治的立場とした中国知識人たちと、魯迅との論争を平行して論じている。それらは相互に絡み合って展開され、中国知識人たちが受容した西洋政治哲学なるものが、いかに中国の変容を被ったものであったかが、東漸した西洋政治哲学それ自体の内在的検討を通じてあきらかにされていく。魯迅が格闘した中国知識人とその思想における中国の変容の内実とは、すなわち、中国文化とりわけ強靱な生命力をもった儒教であった。

第一章においては、日本に留学していた若き魯迅の思想的原点となるいくつかの論考を手がかりに、かれの初期の思想が分析される。かれは、章炳麟の仏教やヘーゲル弁証法が混在した進化論である「俱分進化」の思想に基づきながら、西洋文明の歴史に偏至の傾向を認め、多数と物質に偏至した西洋文明を批判して、個と精神の作興を主張したのであった。この思想が、日本に留学していながら日本近代化を批判的に見る眼を養い、他の中国留学生とは異なる、中国民衆の愚弱な精神の変革を文学によって実現しようとする選択に

つながった。社会的な目的と効用をもつ文章による社会変革を目指す魯迅の作品は、創作ですら文学というよりも思想的性格をもつ作品となっていった。その遠因は、これらの論考における思想に見出すことができるとされる。

第二章においては、帰国後、その決意とは裏腹に、沈黙を強いられた魯迅を分析する。袁世凱政府の監視下にあつて、墓誌の拓本収集という政治的無関心の行動を自らに課すのである。しかし封建的勢力の新たな国家再編の動きは急であつた。西洋近代思想と封建的統治の融合を目指す「二重思想」や、国家再編の手段として儒教を利用せんとした孔子教の出現は、魯迅に『狂人日記』を書かせることになる。そこに秘められた孔子教批判の意図は、ただちに論理的な表現者を見出した。呉虞は、中国の歴史を儒教による酷薄な支配の歴史であるとし、魯迅の思想を「人を食う孔子教」と的確に表現した論文によって、思想界に衝撃を与えた。しかし、呉虞の批判も支配者の民衆に対する圧迫といった観点にとどまり、魯迅の批判の深刻さには及ばなかつた。魯迅は支配体制の教学が、支配されている民衆や支配者を批判する当の知識人の精神にまで深く浸透し、その精神を規定していると考えた。魯迅にとって、批判されるべきは、支配/被支配の関係にとどまらない。民衆と知識人の精神それ自体が、批判の対象であり、改造されなければならない対象なのである。そのための思想的武器となつたのは、章炳麟、嚴復が中国にもたらした進化論であつたとされる。

第三章においては、魯迅の独特な進化論が検討される。西洋思想の中国的受容には多くの問題があつた。章炳麟、嚴復が中国的教養によって、西洋政治哲学を受け入れたことによる影響もあつたであろうが、問題はそれにとどまらない。むしろ魯迅は、中国社会のあらゆる階層に見られる伝統的精神、文化、思想、現実生活といった具体的事物を、魯迅自身が消化した進化論の見地から独特の筆致で批判した。その過程で、魯迅の進化論は、その歴史意識において、独特の相貌をもつようになっていく。『中国小説史略』は、あらゆる知的営みと表現手段を貫いて、中国精神史を支配者の思想で染め上げていた儒教に対する根源的な批判を意図したものであつた。それまでの魯迅に、歴史を見る論理、表現方法として進化論があつたとすれば、魯迅の思想に政治思想的な内容、内実を与えたものが、中国の小説史における儒家に対抗する思想としての「民衆の思想」の発見であつた。儒家が荒唐無稽のゆえに軽侮し、放擲した小説に、「民衆の思想」が生き残っていることを、魯迅は発見した。こうして、『中国小説史略』の成立を契機に、魯迅の政治思想は、進化論の思想を用いて「民衆の思想」を表現するという、明確な目標をもつことになつたと言ひうる。

第四章においては、この魯迅の歴史意識と対比されるべき、日本経由で訪中していたデューイから胡適が取り入れたプラグマティズムが分析される。胡適が受容した「実用主義」は、西洋政治哲学としてのプラグマティズムの根源的理解とは、ほど遠いものであり、中国的に卑俗化されたものであった。しかし中国では、進化論に対する異質の思想的土壌となりえたものであった。胡適は資料の考証に基づく歴史解釈を、進化論がもたらした歴史の運動論、変異の思想に対置した。それゆえに、胡適の儒教に関する「実証的」歴史解釈は、魯迅の歴史意識とは相容れないものとなった。さらに言えば、魯迅にとって、中国「実用主義」とその後に来る中国マルクス主義には、通底するあるものがあつた。それは、またしても、かの中国知識人の伝統的思想として生きのびる儒教であつたとされる。

第五章と第六章においては、魯迅の思想的転回と、魯迅と中国マルクス主義との関係とがそれぞれ取り上げられている。上海において魯迅がマルクス主義と直接対峙することになったのは、日本から輸入された革命文学を自らの思想とした青年たちによる批判に晒されたことがきっかけであつた。日本から革命文学をもちこんだ創造社、太陽社の同人たちは、大衆に絶大な影響力をもつていた魯迅を、旧態依然とした思想の持ち主として激しく攻撃した。魯迅はこれらの青年たちの攻撃に、全力で対決した。そして論戦の過程で、自らも論敵が用いるマルクス主義の社会科学的理論を、積極的に吸収していった。魯迅の論戦の方法は独特であつた。論敵を一度自己の中にとりいれて即自化し、ついで自己の内部で加工した相手の思想を、対自化して、典型として叩く。したがって、その論戦はつねに魯迅自身の思想的発展の軌跡を描くとともに、かれの生きた時代の歴史的性格を思想的に浮かび上がらせるのである。

革命文学の同人は日本を経由することによってマルクス主義を丸抱えでとりこんだ。そこで日本マルクス主義の思想的特質が一瞥された後に、魯迅のマルクス主義との邂逅と格闘とが描かれ、あわせて中国マルクス主義者に対する魯迅の個性的な批判の展開が跡づけられる。さらに、マルクス主義を標榜する青年たち、魯迅が評価した李大釗、瞿秋白のような青年と、郭沫若、成仿吾のような魯迅が否定的に考えた青年の思想を論じた後に、上海での蒋介石による4・12クーデタを契機とした魯迅の思想的転回が描かれる。青年が青年を殺戮し、友を敵に売り、血で血を洗う現実政治を眼前にして、魯迅は自己の進化論が破産したと述懐するに至る。

中国共産党の党内哲学者、艾思奇は、魯迅が進化論からマルクス主義の弁証法へと思想的転回をしたという。それは共産党内理論家が共有する、政治思想家としての魯迅理解、

ならびに評価であったと言いうる。しかし、それでは具体的に何が、魯迅の思想における変化となったのかが問題となる。魯迅の思想は、このクーデタによる思想的転回の後も、依然として魯迅独特の論理と相貌を維持しているからである。今日に至るまで、魯迅のもつ強い政治的影響力は、中国では政治的に魯迅の思想を利用しようとするか、文学者として魯迅を政治的に無害化して論じるかの選択を研究者に迫る。ここではそのどちらでもなく、魯迅の思想的転回を客観的に解明するために、東漸した西洋政治哲学のひとつとして、中国マルクス主義が論じられている。こうした論点を追究する上での困難は、ダーウィンの進化論とマルクスの進化論理解にあった。この観点から、マルクスの『剰余価値学説史』と『資本論草稿集』におけるダーウィンへの言及を探索整理し、ダーウィンがマルサスの『人口論』からとりいれた、自然選択 Natural Selection の思想に、マルクスが批判的であったことが解明される。新旧、強弱の淘汰の思想は、マルクスにおいては懐疑的に論じられている。したがって、残る思想は「種の変異」、自然と社会の歴史的変異ということになる。この観点から魯迅の思想の転回を理解すると、魯迅は「拿来主義」（取ってくる主義）によって、進化論とマルクス主義に対峙したこと、すなわち魯迅の思想的取捨選択の独特な手法が明らかとなる。

第七章においては 1930 年代左翼作家連盟における魯迅の最後の論戦が分析される。魯迅は自らが論敵とした革命文学青年たちとともに、左翼作家連盟を結成した。この連盟は共産党の大衆組織の性格をもち、魯迅はその名声を利用されていることを承知の上で、共産党に同調しながらも批判者としての立場を確保しつつ、かつての論敵たちとともに組織活動を行った。その間に魯迅は、中国自由主義、民族主義（ファシズム）、第三種人、トロツキズム、スターリニズムといった、当代の西洋政治哲学を自己の政治的立場とする知識人たちと、最後の論戦を繰り広げる。それらは歴史的でもあれば論理的な現代思想の系統的展開という相貌をもっており、魯迅の思想的円環の最後に位置している。多くの知識人青年が、後に共産党の文化政策を担うようになるが、そのときにいたるまで、魯迅の行った批判の影響は及ぶことになる。

第八章および結語において、魯迅が指摘した中国知識人の基底にある、民衆を知らず遠ざける儒教的思惟や、西洋から東漸する政治哲学の摂取において露呈する、中国文化と中国知識人がもつ弱点が、魯迅の政治思想に基づいて、総括的に論じられている。同時に、魯迅の知識人論が、官僚主義や行政における検閲といった政治的現象についても、深刻な政治的批判理論となりうる可能性が指摘される。知識人が行政官僚となり、他の知識人や

民衆に対するとき、行政の文をもって自己の知を表現する。魯迅が憎んだ儒教的知に基づく行政の文学が、そこにある。そこにあらわれる非人間的な組織の論理と、それに隷従する人間の奴隷性は、今日の政治にも見出される。それに対する批判の先には、魯迅の思想と文に傾倒しながらも、魯迅の雑文と政治的風刺を権力者の立場から危険視した毛沢東がいる。魯迅が同時代の民衆にとって、中国政治思想の中心にいたのと同じ意味合いで、毛沢東は魯迅亡き後の中国の政治思想の中心に位置した。毛沢東は魯迅が自らのものとした中国文化が内包する問題、すなわち知識人と大衆の問題に、自らも直面したはずである。魯迅が生涯をかけて闘争した対象は、確実に毛沢東にも共有されていたのではないか。もしそうであるとすれば、魯迅の民衆、知識人、権力についての洞察が、その後の中国において毛沢東という政治思想家の政治思想と政治指導に、どのように内在していたのかが問われることになることになると示唆されている。

### Ⅲ 論文の特徴と評価

1) 辛亥革命によって新たな国民統一への期待が胎動し始めたとはいえ、依然として半封建半植民地の状況下にあった 1920 年代の中国は、30 年代に入ると、国共内戦のみならず日本の帝国主義的侵略の脅威に直面することになった。こうした深刻な状況下、中国知識人は、「奴隷的精神」を生む伝統的儒教イデオロギーからの脱却を図るべく、西洋の政治・社会思想を直接的に、あるいは日本を経由して間接的に、積極的に摂取し始めた。本論文の第一の、そして最大の特徴は、中国に流入した西洋思想、なかんずく進化論やプラグマティズム（実用主義）、マルクス主義、さらには民族主義（ファシズム）の中国知識人たちの受容の有様を、個々の思想家の豊富な資料を踏まえて、詳細に追究し、そのことによって中国知識人たちが直面した問題の複雑な諸相を明らかにしている点であり、この点だけでも非常に高い評価に値する。

2) 上述した総体的な見取り図を描くなかで、本論文は魯迅に焦点を当てる。魯迅は当初「進化論」の強い影響を受け、儒学秩序が永遠性をもつものではないことを自覚する。やがて 1920 年代後半からマルクス主義の影響下に「思想的転回」を図り、晩年に至って毛沢東への評価と支持に至ったプロセスを明らかにする。この論証のプロセスの難点は後に触れるが、本論文が浮き彫りにした魯迅の思想的「強靱さ」については説得力のある証明がなされている。本論文が強調するのは、文学者、政治思想家あるいは政治活動家としての

魯迅が西洋思想を受容するさいに決して無前提ではなかったことである。魯迅は常に、①個々の西洋思想を中国の現実に照らして選択的に受容すべきことを主張し、②さらに重要なことには、西洋思想が中国知識人の内面の変革に、すなわち〈儒教と食人〉の同居する伝統的心性の打破に、本当に繋がるのか、言い換えれば、真の自由と主体の確立に至るのか、それとも、単なる直輸入に過ぎず、体制追従的知識人や投機的知識人を生むだけなのかを問題とした。こうした問題関心を背景に、文学者である魯迅自身は、儒教イデオロギーから排除ないし蔑視されてきた伝承や物語（小説）なかに、儒教を超える、あるいは儒教に抗する民衆思想の可能性を発掘しようとした。具体的な物語の内容に即して少し分析をしてもらえれば、印象はより鮮明になったと思われる。

晩年の魯迅の文筆活動の大半を占めるいわゆる「雑文」の取り扱い方は本論文の大いなる貢献である。それらの雑文は非常に短いものが多く、したがって、それらが書かれた背景の理解なくしては正しい評価はできないと正当にも指摘されてきたが、本論文ほどにそのような背景的理解に紙面を割いている例はないであろう。

さらに、高く評価できる点は、従来の中国政治思想研究が、中国プロパーの研究であったのにたいして、本論文は日本やヨーロッパの政治・社会思想との比較を取り入れた、非常にパースペクティブの広い研究である点である。これは、たとえば、東漸するさまざまな西洋思想をそれらの輸入元まで丹念に調べ上げた研究である点にも現れている。各国の儒教思想研究をそれぞれの国に押し込めずに、東アジア政治思想研究への展望を開く可能性を秘めた研究ということができる。

3) 魯迅とマルクス主義との関係は、それが政治的に利用されてきたという複雑な事情もあり、研究者のあいだでも評価が定まっていない。本論文は、1927年から28年にかけて「魯迅がマルクス主義を受け入れて、弁証法的唯物論をもって事物の評価をするようになった」(193頁)と述べる。しかし、「弁証法的唯物論」という言葉の意味については措くとしても、魯迅がマルクス主義へ思想転回したことの論拠の提示は弱いと思われる。「書籍購入控え」(209頁)や「中国左翼作家同盟」の発起人になったことなどの間接証拠のほかには、魯迅が階級の「原有」を主張した点や、中国自由主義者の主張を『「階級観念をかれらにつぎこむ」人がまだいない場合』の理屈だとして批判した点(252-5頁)が触れられる程度である。むしろ本論文から読み取れるのは、魯迅が中国マルクス主義をそれが自己批判を内在化していないとして、また現実を直視しない表面的な模倣に留まる危険があるとして厳しく批判したことである(284頁)。魯迅は流入する西洋思想のなかで決してマルク



ス主義を特別扱いしなかった（283 頁）。これこそ魯迅の「思想的強靱さ」、オリジナリティと一貫性を証明するものであって、これらは魯迅がマルクス主義への共感を抱いたとは言えるにせよ、思想転向したことを示す証拠としては不十分ではなかろうか。

また、これは本論文の中心テーマではないが、魯迅の思想の毛沢東にたいする影響とその評価は、十分な説明がなされておらず、誤解を招く虞れがある。今後さらなる検証が求められるゆえんである。

4) 最後に若干の問題点を指摘しておこう。本論文においては 1980 年代以降の魯迅研究がほとんど利用されていない点が問題であろう。その理由を口頭試問で質したところ、この期間の魯迅研究のほとんどが文学者魯迅についての研究であり、政治思想家魯迅の研究が皆無に等しいという返答があった。さらに、20 世紀の「中国イデオロギー批判」という性格をもつ本論文において、いくつかの思想・イデオロギーや個々の思想家が十分には扱われていない点も問題である。たとえば、中国の自由主義をめぐる評価などがそれである。

#### IV 結論

本論文は、魯迅の政治思想研究として、全体として論旨明快であり、手堅い内在的研究であり、問題提起力に秀でており、非常に優れた業績である。単に魯迅の政治思想や中国政治思想の研究のみならず、ひろく東アジアにおける政治思想（研究）にたいする問題提起と発展に寄与するところもまた大きいと思料される。上で指摘した若干の問題点も、論者の今後の研究の発展可能性への期待の大きさのゆえであり、本論文の価値を損なうものではない。以上の理由によって、本論文は博士（政治学）の学位を授与するに値すると認められる。

2008 年 12 月 27 日

審査員	(主査)	早稲田大学教授 Ph. D. (シカゴ大学)	飯島昇藏
		早稲田大学教授	齊藤泰治
		新潟大学教授	谷 喬夫